ISSN 0285-9823

女子大國文

第百七十五号

令和六年九月発行

伝二条為明筆源氏物語切「賢木」の性格……池尾和也（一）
化学者田村典瑞、医師有田兎毛三
――与謝野門下東京新詩社歌人・田村黄昏の尊属について――……宮本和歌子（三三）
二〇二三年度公開講座
『時代不同歌合』再考……寺島恒世（五九）
二〇二三年度公開講座
多重化される物語
――泉鏡花「清心庵」と富岡永洗の口絵――……出口智之（九三）
彙報……（一二九）

京都女子大学国文学会

女子大國文　第百七十五号　令和六年九月発行　京都女子大学国文学会

女子大國文　第百七十五号
令和六年九月十五日　印刷
令和六年九月三十日　発行
〒六〇五―八六〇一　京都市東山区今熊野北日吉町三三番地
編輯兼発行者　京都女子大学国文学会
電話　〇七五―五三―九〇七六
FAX　〇七五―五三―九一二〇
振替　一四一〇一―三五一三五二
〒六〇二―八一四六　京都市上京区上長者町通黒門東入
印刷所　西村印刷株式会社
電話　〇七五―四四―四一〇八(代)
FAX　〇七五―四三―六二八二

彙　報

○女子大國文第一七五号をお届けします。
○小椋嶺一先生のご逝去を悼む追悼文を掲載いたしました。
○卒業論文・修士論文発表会の論文要旨・執筆体験記と、発表会に参加した在学生の感想文を掲載いたしました。また、新入生歓迎行事の感想文を掲載いたしました。

研究室だより

○卒業論文・修士論文発表会を対面・オンラインのハイブリッド形式にて開催いたしました。
○新入生歓迎行事　能楽鑑賞会を対面で開催いたしました。
○昨年度一年間、京都府立大学にて国内研修されていた中島和歌子先生が、元気に戻ってこられました。
○今年度一年間、大谷俊太先生が京都大学にて国内研修されます。
○今年度の文学部国文学科長および国文学会代表幹事は、中島和歌子先生です。中西俊英先生、野澤真樹とともに、国文学科・国文学会の運営に尽力しておられます。

二〇二三年度国文学会行事（前期）

○新入生学科ガイダンス
四月五日（金）午前九時より
於：J二二四・J二〇二教室（クラス毎に分けて実施）

○卒業論文・修士論文発表会
五月一一日（土）一三時より
於：J四二〇教室

〈卒業論文〉
『万葉集』巻九・一七四〇番歌の「白雲」考　手嶋　桜子氏
―「丹後国風土記逸文」との比較を中心に―
『萬葉集』〈挽歌〉の「黄葉」　堀　杏純氏
―上代における「黄」のイメージを中心に―
『隠岐本新古今和歌集』における後鳥羽院の詠について　岡田　愛海氏
「オネエ言葉」の性別的属性と特性　齋藤　摩弥氏
―テレビ番組での発話をもとに―

〈修士論文〉
田辺福麻呂歌集「哀弟死去作歌」の研究
―「はふ蔦の己が向き向き　天雲の別れし行けば」考―　森下　成海氏

○新入生歓迎行事　能楽鑑賞会

五月二五日（土）一三時より

於：音楽棟演奏ホール

能の歴史・囃子・狂言に関する解説を聴講、謡体験、装束着付実演、狂言「寝音曲」、仕舞「橋弁慶」を鑑賞。

小椋嶺一先生追悼文

小椋嶺一名誉教授の御逝去を悼む

笹川祥生

小椋氏と最初に出会った所は、京都駅前の某食堂である。小生の京都女子大学への転職も決定の見通しとなり、当時学科主任であった小椋氏と対面の運びとなった。話の中身は事務的打合せが主であったと思う。小椋さん（以下、言い馴れた「さん」付けで）は学内事情に明るく、着任後は何かと教えてもらい、納得したことも度々あった。

余談ながら、小椋さんの幼い時、父君が本願寺派本山に出仕され、京都では本圀寺塔頭内の一棟を仮寓とされたとお聞きした。その縁で、朝夕、題目太鼓の音を耳にしながら育った、と。小生が法華宗寺院出身ということで、往年の一時期を懐しく思い出されたらしい。

小椋さんは著書『秋成と宣長　近世文学思考論序説』（平成十四年六月、翰林書房刊行）の「あとがき」の中で、次の通り記す。

> 寺に生まれ育ち、龍谷大学という宗門大学の気風の中にありながら、仏教や宗学へは赴こうとせず、少し斜に構えていたことに、今となってはいささか後悔の念がないわけではない。

寺院住職の子（俗に羅睺羅と称す）として生れ、継嗣となる可能性を抱えながら成長するとき、その雰囲気に違和感を感じる人もある（もちろん、感じない人もある）。故人の気持の中に踏み込むようで申し訳ないが、小椋さんも、例えば青春の一時期に葛藤を感じられたのではないか。

時を経て、小椋さんは宣長と秋成の「文学思想の特質」と、その淵源たるそれぞれの「思惟構造」の解明に没頭する。大著『秋成と宣長』に結実した小椋さんの業績について、論評するだけの学識を、小生は持たない。小椋さんが探求を進めた結果、秋成に、より共振するところがあったと了解するとき、寺院の後継者として感ずる重圧（何百年と継いた真宗の僧侶と、小生が属して

いた世襲を規定上前提としない宗派とでは、重圧の感じ方が異なるかもしれないが）は、研究の進展の中で、徐々に消化されていったのではなかったか。

小椋さんが愛酒家であったことは間違いない。終着駅で目が覚めた、とか、列車が車庫に入ってから車掌さんに起されて、歩くと意外に遠い車庫の線路だった、とか、酔後の余談も耳にした。それらのことは、小生の赴任以前の出来事で、小生の知る小椋さんは、機嫌よく、時々は辛辣な（一座の微笑を誘う程度の）感想を述べ、概ね穏和な飲みぶりであった。同じ東海道線での帰宅時間は、小椋さんのおかげで、まずまず常識の範囲で済んだ。

自坊の寺務については、校務との両立が、時間的に聊か困難な、という事情もあり、夫人の尽力で無事切り抜けられた、と常に感謝されていた。退職後は寺務に時間を割ける状況となり、小椋さんにとっても、また、夫人にとっても、望ましい成り行きとなったと思う。

大学の教員としては、教育と研究に余念なく、宗教部長として大学運営上の要職も実直に勤められた。退職後は、自坊の経営を積極的に取り組んでおられた様子で、宗教家として安心の境地に居られた、ということであろう。小椋さんにあっては、自らの学問が一定の果実を獲た、という感触が安心の一つの基盤となったと愚考する。宗教家としても、学者としても、更なる発展を示す可能性を残しながら、予想外に早く冥界へ旅立たれたことは、残念という他ない。

右、小椋さんからは、勝手な推測ばかり、と叱られそうだが、宗教的寛容でもってお許し頂きたい。

小椋先生との思い出

京都女子中学高等学校教諭　村　田　知　子

小椋先生が亡くなられたことを知ったきっかけは、京都女子中学校の職員室の机上に置かれた学園報だった。ご退職されてからしばらくは経つものの、小椋先生のお元気な姿と笑顔と明るい御声しか思い出せない私は、その小さな訃報に全く現実味がなく、呆然とした気持ちでそのまま学園報を閉じた。

同じ学園内で勤務している私は、あのときすぐに国文学科にいらっしゃる先生方に詳細をお尋ねすることもできた。でも、敢えてそれをしようとしなかったのは、現実のこととして、小椋先生の訃報を受け止めたくなかったからだ。

追悼文を書こうとしてパソコンに向かったものの、やはり小椋先生がいらっしゃらないという実感は湧いて来ない。一種の覚悟のような気持ちをもって、中学高校の校舎から徒歩わずか五分に

あるJ館に向かってみることにした。

今、続々と建て替わっている京都女子学園の校舎の中で、国文学研究室のあるJ館だけは小椋先生にお世話になっていたあの時のままだ。何年かぶりにJ館四階を訪れたその日はあまりに静かで誰の気配もなかったが、懐かしい研究室のあったドアの前で一人泣きそうになった。

小椋先生には大学入学後すぐの近世文学概論の講義でご指導を受けてから、六年間の学生生活を通してずっとお世話になった。

どういう話の流れだっただろうか、大学三回生の終わり頃に何気なく、研究室で「大学院へ進学したいです」と小椋先生に話したことがあった。「君、大学院を出た後のことも考えてるか。二十代後半になってから、仕事を探すのは大変なこともあるかもしれへんけど……」とあまりにも心配そうな表情をされたので、実は先のことまで具体的に考えていなかった私は大変申し訳ない気持ちになった。「ここでもう少し学んで、中学高校の国語科の教員になりたいです」と慌てて言葉を付け足すと、少し安心したような表情をされ、「教員になって活かせることはあるやろうな。英語も大事やし、どの時代の作品のことも偏りなく勉強しておきなさい」という励ましの言葉をいただいた。

小椋先生には、その後も卒論のことや大学院の進学について、修論のことや公立中高での講師経験のことに至るまで、本当にたくさんの話を聞いていただいた。小椋先生は「あれをしなさい」「これをしたらいい」とご自身から積極的にアドバイスをされることはあまりなかった。しかし、何かのレポートをお見せしたり、相談を持ち掛けたりすると、静かにうなずきながら、長い時間をかけてじっくりと話を聞いてくださった。そして、こちらの想像以上に丁寧なお返事をいただいたり、ずいぶん後までその話を覚えてくださったりするので、恐縮したことが何度かある。

この間は、実家にあった学生時代のノートの束と一緒に、小椋先生から送られてきた数枚の葉書が出てきた。その葉書には「お尋ねについて名称正確でなかったのでお知らせします」とか、複数の研究書や辞書などの書名とともに「必要ならば、来週でよければお貸しします」などと書いてあった。おそらく、私が小椋先生に作品や本についての質問をしたことに対し、後で思い出されて、すぐに葉書を送ってくださったのだろう。確かに、一人一台学生がパソコンを持っているという時代でもなく、メールでやりとりする習慣はなかったが、翌週になればお目にかかれたであろうところ、すぐに葉書を出してくださったところが小椋先生らし

い。私もそんな小椋先生のお気持ちが嬉しくて、その葉書をずっと残しておいたのだった。

小椋先生との思い出の品と言えば、葉書と一緒に出てきた「うどん学校」の「卒業証書」もその一つだ。四回生八月末の小椋ゼミの旅行では、高速バスに乗って香川県の琴平に行った。ゼミ旅行のメインプログラムは、夜に旅館で行われる卒論中間報告だったように記憶している。夜の中間報告に向けて初めのうちはゼミ生もバスの中で慌てぎみであったが、旅行中の小椋先生は終始、家族旅行中のお父さんのような笑顔で、いつのまにか、ゼミ生たちの焦りと緊張もどこかにいってしまった。夜は旅館で簡単な卒論中間報告をしたようにも思うが、「うどん学校」で讃岐うどん作り体験をして「卒業証書」をもらったり、芝居小屋を見学に行ったり、帰りのバスの中でも学生たちの賑やかなおしゃべりは止まらず、大学生活の楽しい思い出の一つとなっている。

大学院に進学してからは、修論の準備にこれといった進捗がなくても、日々、小椋先生の研究室を訪ねては、何かとお話を聞いていただくことが増えた。いつ伺っても忙しそうなご様子をされたことは一切なく、いつ来てもいいよ、という雰囲気を出されていたが、今思えば、かなり研究のお邪魔をしていたのかもしれない。

二六歳から、京都女子中学高等学校の国語科教員として教壇に立つことになったが、その後もいつでも小椋先生にお目にかかれると思っていたし、当初は教員生活についても定期的にご報告するつもりであった。しかし、いざ、専任教員として教壇に立つと、徒歩五分の国文学研究室に伺う時間すらなかなか取れないほどに目まぐるしい毎日だった。

それでも、ご定年で退職なさるまでは何度か研究室でお話しさせていただく機会があり、お目にかかるといつも私の体調などを気遣っていただいた。

小椋先生は毎年、お年賀状にご自身でお詠みになった短歌を書かれていて、私はその短歌を楽しみにしていた。最後にお年賀状をいただいたのは二年ほど前であっただろうか。それまではご退職後も様々な集まりに参加なさっていることをお書きになり、コロナ禍まではお元気に出かけていらっしゃるご様子であった。近頃、年賀状じまいをされる方も多いので、小椋先生がお年賀状を出されなくなったことについては、実はあまり気にとめていなかったのだが、せめて、あのときお電話の一つでも差し上げていれば、と今になって後悔している。

昔と変わらない様子の国文学研究室前の廊下で、もし、今ここ

に小椋先生がふらりと研究室から出て来ていらっしゃっても何の不思議もない気がした。

今、小椋先生に会えるなら、教員生活のこと、授業で扱っている作品のこと、今の中高生たちの様子についてなど、お話したいことはいくらでもある。そして、秋成や仏教について、短歌に詠まれていた小椋先生の思いについて、もっといつまでもお話を伺いたかった。

「ここで学んだことを活かして、中学高校の国語科の教員になります」。小椋先生の研究室で、そう話してから二十五年が過ぎ、今日も私は教壇で生徒たちに語りかけている。小椋先生にいただいた御恩を直接お返しすることはもうかなわなくなってしまったが、中高生に向き合う毎日の中、生徒たちへの恩送りという形で感謝の思いを表していきたい。

小椋先生、ありがとうございました。

卒業論文・修士論文発表会（五月一一日）

『万葉集』一七四〇番歌の「白雲」考
―「丹後国風土記逸文」との比較を中心に―

手嶋桜子

〈論文要旨〉

『万葉集』巻九・一七四〇番歌は高橋虫麻呂の作で、「浦島子物語」を詠んだものである。常世から故郷へ戻った浦島子が、娘子から「決して開けてはならない」と念を押されて持ち帰った匣を開けてしまう場面、その匣に込められていたのは「白雲」であった。しかし、それが指すものに対しては「浦島子の霊魂」「娘子の霊魂」「常世の霊力」と見解が分かれており、定説を見ない。

今回の研究は、浦島子歌の「白雲」について、「丹後国風土記逸文」との比較検討や『万葉集』全体の分析を通して、その正体を明らかにしようとするものである。

『万葉集』における雲の詠まれ方からは、生動的な雲に人の姿を重ねる発想があったことが確認できた。また、男女の愛情表現という側面を持つ「袖振り」の語に着目し、匣を開けた後の浦島子の動作は、招魂のみならず、自身から離れ常世の方へと去ってゆく娘子を留めようとする意味を持った動きであると判断した。

他方『風土記』の浦島子物語に描かれる匣の中身は「芳蘭之体」であったが、その表記や、「風雲に従って来た娘子・風雲とともに天に昇った芳蘭之体」という描写の仕方などから、娘子の姿を表したものと見るのが自然と考えた。

浦島子物語を神仙小説の影響を受けたひとつの創作物と捉える本論文の立場からすると、これらのことが、浦島子歌の「白雲」もまた娘子の霊魂を表している、という見方を裏付けるものとなった。

また、浦島子の死という結末については、「白雲」が浦島子の傍を離れた結果としてではなく、『風土記』とは対照的な浦島子像を描き出すための一手段として捉えることも可能と思われた。

以上のような検討の結果、浦島子歌において匣に込められていた「白雲」は、「娘子の霊魂」であるとの結論に至った。

〈卒論執筆体験記〉

私がこの上代ゼミで卒業論文を書こうと決めたのは、皆さんと同じように聴講者として参加した卒業論文発表会での、ある先輩の言葉がきっかけでした。先輩は、卒業論文は何をテーマに書きたいかも大切だけれど「それと同じくらい、指導してくださる先生との相性も大事だと思う」とお話しになりました。その言葉を聞いて思い浮かんだのが、国文学基礎講座のときからお世話になっていた、上代の池原先生だったのです。

心配性の私は、期日までに論文を提出できるのか不安で仕方がありませんでした。就職活動と両立できるだろうか、とか、重要な先行研究を見落としていたらどうしよう、ということから、締め切り当日に印刷機が壊れたら大変…と考えてもどうしようもないことまで、たくさん不安を抱えていました。

対策として心掛けたのは、とにかく早く行動すること。不測の事態にも対応できるよう、提出は締め切りの一週間前を目標にしました。定期的に行われる先生との相談会は早めの日程で設定し、少しでも行き詰まりそうになったらメールでも質問をして都度疑問を解消するように努めていました。

そんな私を支え、導いてくださったのが池原先生です。先生は「論文って最後は自分の力で書かなければいけないものだから」と仰りながら、私たち学生が躓いたときにはいつも手を差し伸べ、また書き進めるための手助けをしてくださいました。いつでも親身になって相談に乗ってくださる先生の、的確な助言があってこそ、無事に執筆を終えることができたと感謝しています。

一回生・二回生の皆さん、必修の基礎講座や講読科目の中には、正直あまり興味のない時代や分野のお話もあると思います。でも、そんな授業も少しだけ前のめりになって受講してみてくだ

さい。素敵な先生や、気になる研究テーマとの出会いに繋がるかもしれません。

そして、三回生・四回生の皆さん、卒業論文のテーマについても、最初はただ疑問を持つだけで大丈夫です。些細な気になることを調べ、深掘りしていくうちに、知識が身につき、書きたいことも増えていきます。そうすれば、何十頁の論文も最後には紙面が足りないと感じるようになると思います。

卒業論文は通常のレポートとは異なり、一年かけて書き上げる学生生活の集大成です。就職活動との両立も大変だと思いますが、ご友人や先生方の力もたくさん借りながら、ご自分のペースで納得いくまで調べ、書いてみてください。皆さんの興味関心に応えてくれる博学な先生のお話を聴くことができるのも、研究室や図書館の壁一面の本を存分に読むことができるのも、今この学生時代だけです。せっかくですからぜひ活用しましょう。皆さんが執筆を終えたとき、楽しかった、やりきったと感じることができたら、私も嬉しいです。

『萬葉集』〈挽歌〉の「黄葉」
―上代における「黄」のイメージを中心に―

堀　杏純

〈論文要旨〉

本論文では、『萬葉集』の〈挽歌〉において、「散る」などの死の忌避表現を伴わず詠み込まれる「黄葉」を研究対象とし、上代における「モミチ」と「黄葉」の関係や、「黄」の用例の検討からその実態を考察した。

「黄葉」と死の忌避表現が見られる例は、「黄葉の散り行くなへに玉梓の使ひを見れば逢ひし日思ほゆ」（巻二・二〇九）、「黄葉の過ぎにし子らと携はり遊びし磯を見れば悲しも」（巻九・一七九六）などが挙げられる。今回論文で取り上げた「黄葉」に忌避表現を伴わずとも人の死を表す例は、「秋山の黄葉をしげみ惑ひぬる妹を求めむ山道しらずも」（巻二・二〇八）、「秋山の黄葉あはれとうらぶれて入りにし妹は待てど来まさず」（巻七・一四〇九）等を指す。

第一章ではじめに、「黄葉」の表記について今日に至るまで多様な論が展開されていることについて触れた。『歌ことば歌枕大辞典』など、辞書をはじめ多くの研究者が主に「漢籍からその表記を取り入れた」とする一方で、最新の『萬葉集』に関する辞

書は「当時の人々が黄色の葉を好んだから」という説を取り上げていることを確認し、自らの立場を示そうと試みた。

『萬葉集』の歌が詠み手の身分問わず生活性の窺える点を特徴としていることから、「モミチ」も生活の中で眼前にして詠まれた可能性が高いと判断できるとし、漢籍「黄葉」とその黄色い葉の実体が重なったため「黄葉」表記が広く一般的に受け入れられたのだと推測した。

第二章以降は〈挽歌〉に詠み込まれる「黄葉」に的を絞り、「モミチ」自体に挽歌を想起させる要因があるのかを探った。第二章で『萬葉集』と同時期の「黄」に「地」や「ヨミ」を表すものが複数見られたことから、「黄」の字が「地下にある死後の世界」のイメージを伴っており、「黄葉」が〈挽歌〉で効果的に用いられたのではないかと見解を示した。

第三章にかけて、「黄」と「地」、そして「地」と「ヨミ」の結びつきについて、前者は陰陽五行説、後者は漢籍「黄泉」から「地下にある死後の世界」という性質の選択的受容と墳墓に見える「ヨミ」の世界観を根拠に、それぞれが上代に強く根付いていたことを理解した。この結果を踏まえ、「黄」が「ヨミ」と関連付けられたと考えるのは特に違和感のないことだと確認した。

以上の検討により、当時、一般的に詠まれたのは黄色い葉のモミチであったが、〈挽歌〉においては漢字表記「黄葉」の「黄」から「ヨミ」が連想されて人の死を想起し、「モミチ」が〈挽歌〉の中で効果的に詠み込まれたのだと結論を出した。

〈卒論執筆体験記〉

はじめに簡単に振り返りますと、卒業論文を執筆するには、行動力と忍耐力が必要でした。何も知らなければ書くことはないので、まずはとにかく情報を集めることが大切です。私は心配性なので、何にも縛られずに取り掛かると情報収集も執筆も中途半端に進めてしまいそうだと思い、「情報を集めきるまで、一文字も書かない」ことを自分に課しておりました。そのような私が文字を打ち始めたのは、締切日から約一か月半前の、十一月九日です。先日の卒論発表会では、リアルな執筆方法についてのご質問が多かったため、私の踏んだ手順と意識したことを記したいと思います。

大前提、辞書等の内容は早めに集め、夏休み中には研究対象に関わりそうな先行研究を一通り読みました。それぞれ一読した後は、数か月後でもざっくりと内容を思い出せるように、一本の論文につき二〇〇字程度でそれぞれの主張内容をまとめました。この一工夫で、タイトルと内容が簡単に結びつき、毎度読み返さなくて済むため、整理に大変役に立ちます。できれば参考文献も別

途まとめておくことをお勧めいたします。

先行研究を効率良く読むコツは主に二つあります。「一番新しい文献から読むこと」と、「参考文献として記されている資料を読むこと」です。

一つ目は池原先生から教えていただきました。執筆時期を無視して読んでしまうと、「既に論破されているもの」も有力な一つの意見として扱ってしまい、後々努力が水の泡になってしまうかもしれません。ただし、その論破内容自体に疑問がある場合は貴重な逆転のチャンスですので、存分に深掘ってください。

発表時期が新しいものから読むと、「現在の研究者たちの意見」を把握できますので、二つ目のコツである「参考文献の参考文献を遡る」ことをしても、「過去の意見」として読むことが可能になります。

参考文献を遡って論文を読むと、より最新の見解の解像度が上がります。大抵、一番初めに説を提唱した人が、一番事細かに論証されているためです。新しい論文では既に「当然」とされることの原点まで辿る過程で、予備知識が自然と付いて来るので、卒業論文の内容に厚みがでますし、口頭試問の際にも卒業論文の内容よりも話を広げて説明することが可能になります。

論文を読み切った後は、自分の説について論述する順序を組み立て、それに必要な資料を「主張したいこと」の間にパズル式で埋めていきました。ここまで出来ていると、あとは肉付けで文章を書くのみです。ただし、「この内容で文字数が足りるかどうか」は先生に要確認です。

書いてからは、同じゼミの方と、高校時代の友達の計七名に添削していただきました。『萬葉集』を知らない人にこそ読んでもらいなさい」というのも池原先生から教わりました。知っている知識があると、どうしても流し読みしてしまいがちだからとのことです。実際、高校時代の友達の方が気になる点を幾つも挙げてくださり、誤字脱字の少なさについて口頭試問でお褒めいただけた程、ほぼノーミスになりました。

ここまで読んでいただくと、「本当に大変そうだな」と不安に思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、好きなことを研究しているため、実はそれほど苦痛ではありませんでした。好きだと興味は尽きませんので、楽しいです。文学について専門的に学べる環境には今後なかなか出会えないので、悔いのないよう、素晴らしい先生方と仲間（と図書館）に目一杯頼りながら、幸せに研究を進めていただけたらと思います。

『隠岐本新古今和歌集』における後鳥羽院の詠について

岡田愛海

〈論文要旨〉

後鳥羽院は、建仁元年（一二〇一）七月二十七日に『新古今和歌集』和歌所を再興し、同年十一月三日に『新古今和歌集』撰進の院宣を下した。そして、元久二年（一二〇五）三月二十六日から翌日にかけて『新古今和歌集』完成の竟宴が催された。『新古今和歌集』は、第八の勅撰和歌集である。勅撰和歌集は、各時代の天皇、上皇の治世を象徴として編まれるものである。つまり、『新古今和歌集』は、後鳥羽院の治世を象徴する存在であり、後鳥羽院が都で君主として君臨していた時代の産物である。加えて、『新古今和歌集』は、藤原定家や藤原家隆以下、複数の撰者を任命したが、実際は後鳥羽院の親撰に近い、特異な成立過程を有することで知られる。つまり、『新古今和歌集』は、撰者以上に後鳥羽院の意思決定が反映されてきた。『新古今和歌集』は、竟宴後も切継が続き、編纂作業は長期に亘る。それは、承久三年（一二二一）の承久の乱の敗北による隠岐配流後にも続けられた。

『隠岐本新古今和歌集』（以下、隠岐本と略称する）は、後鳥羽院の隠岐配流生活の中で、後鳥羽院が『新古今和歌集』の切継作業を行い、一六〇〇首を精撰して、嘉禎元年（一二三五）頃に成立した。隠岐本跋文には、後鳥羽院の隠岐本精選意図が記され、後鳥羽院親撰の集という面が強調される。

隠岐本跋文は、後鳥羽院が隠岐本の歌の精撰方法と、自身の歌を除棄する理由が述べられている。跋文の中で、院は後鳥羽院歌について言及し、自身の歌を削ることを示す。

後鳥羽院は、隠岐本精撰にあたり、除棄歌に除棄記号を附した。本論で検討する精撰歌とは、隠岐本で残された後鳥羽院の自撰歌である。

これまで、隠岐本に関する先行研究は、除棄歌を中心に、除棄記号・歌・配列・歌人の研究が進められてきた。しかし、隠岐本精撰歌に関する研究は行われてはいない。そして、隠岐本と後鳥羽院に関する研究においても論の中心は除棄歌である。そこで、本論では隠岐本における後鳥羽院の精撰歌に焦点を当て、精撰歌が残された理由から後鳥羽院が隠岐本で演出したかった後鳥羽院像について検討した。

本論では、表一と表二を使用し、後鳥羽院の精撰理由を考えた。

第一章では、表一の隠岐本精撰歌に見られる特徴から精撰理由を考えた。表一から見られる特徴は、後鳥羽院自讃歌が多く残さ

れていることと、水無瀬詠が残されていることである。

第二章では、後鳥羽院の人生から精撰理由を考えた。表二から見られる特徴は、後鳥羽院が和歌初学期から後年に至るまで過不足なく歌を残していることである。しかし、出典を見ると、出典に偏りが見られる。それに伴い、述懐性のある歌が除棄されていることがわかる。

精撰歌の特徴から、後鳥羽院は、隠岐本を後鳥羽院の栄華時代の象徴として残していくことを考え、その時代を代表するに相応しい歌を精撰したと考えられる。つまり、後鳥羽院精撰歌には、院が都で君主として君臨していた時代の総まとめの役割があると考えられる。後鳥羽院にとっての後鳥羽院像とは、都で治天の君として君臨していた頃の自分であり、栄華時代の自分を隠岐本の中に留めておきたいという考えが後鳥羽院の中にあったと考えられる。

〈卒論執筆体験記〉

私が卒業論文のテーマを決めたきっかけは、三回生の中古ゼミで取り扱った和歌でした。他の発表者の方々もこれまで受けた演習や授業からテーマを見つけていたように感じました。

体験記では、論文執筆で意識したこと、役立ったこと、苦労したことの三点を中心に話をしたいと思います。

まず、卒業論文で私が一番意識したことは、スケジュール管理でした。自分の中で目標を設定し、いつまでにこれだけの範囲をやると決めてから行動に移していました。例えば、「夏休み中は、先行研究を全て集めるぞ！」「今週は、第一章第一節を書き上げるぞ！」という感じで。卒論では、内容の部分も重要ですが、それと同じくらい提出期限も重要です。先々のことを考えて行動することが卒業論文の執筆には欠かせないと思います。

次に、論文執筆のなかで役立ったことは、二つあります。

一つ目は、先行研究の要旨や必要箇所をまとめたファイルを作成したことです。先行研究をまとめたことで、論文執筆の際に「どこに何が書いてあったのか」探す必要がなくなりました。また、文字に起こしておくことによって、先行研究の引用も楽に進めることができました。

二つ目は、論文構成のためのノートを一冊作ったことです。そこに卒論執筆のスケジュール記入や、先生との会話で挙がってきた疑問点をメモしておきます。そうすれば、自分がこれから何をしなければならないのかが明確化され、行動に移しやすくなります。

さらに、論文執筆のなかで苦労したことも二つあります。

一つ目は、先行研究を全て見ることです。先行研究探しは、自

分が見つけた論文の注釈書や参考文献を遡って芋づる式に見ていきます。その時に、関係ないと判断した箇所から新たに関係する論文が見つかる時があります。つまり、先行研究探しは長い時間がかかります。このことを視野に入れて、早め早めから行動することが重要だと思います。

二つ目は、自分の意見を書くことです。私は、この自分の考えを文章に起こすことに一番時間がかかりました。三回生までは、先行研究がまとめられ、そこに少し自分の考えが加えられていれば良かったかもしれませんが、卒業論文では、自分の意見を書くことが求められます。つまり、自分の考えを中心に論が展開されるのが卒業論文です。先行研究は、自分の論を補強するための材料に過ぎません。そこを意識して執筆に取り組むことが大切だと思います。

最後に、卒業論文のテーマには、自分が調べたいと思ったことを選んでください。そして、一年間そのテーマと向き合い、卒業時には「自分はこのテーマに関しては他の学生に負けないくらい知識がある」と誇りに思えるようになってください。応援しています。

「オネエ言葉」の性別的属性と特性
―テレビ番組での発話をもとに―

齋藤摩弥

〈論文要旨〉

今回、テーマを「オネエ言葉」とし、文末表現と人称詞の観点から「オネエ言葉」における性別的属性と特性を分析した。

「オネエ言葉」の性別的属性に関して、多くの先行研究では「女性語」を誇張したものだと主張されている。一方「男性語」の特徴を持つという主張もある。全く新しいものだという主張もある。

またその特性に関しては辛辣さを持ち、対象者を侮辱するものだと捉えられている。

しかし、これらの分析に用いられたデータは種類が少ない、あるいは印象にとどまる程度のものが多い。そのため、本論では多岐にわたる文末表現に着目し、分析を行った。

分析で用いたデータは二〇二三年七月一一日から七月三一日までの三週間、兵庫県の地上波とBS放送で視聴可能なテレビ番組（再放送・ドラマを除く）に出演している「オネエタレント」六名の発話を、筆者が文字に起こしたものである。このデータから、一五の先行研究を基にして「男性用」「中性用」「女性用」と

定めた六三の文末表現と、データ内にみられた人称詞をすべて抽出した。また人称詞の性別的属性も先行研究の分類に準じて判断した。

結果は次の通りである。

まず性別的属性について。文末表現において、女性性の傾向が強い対象者は一名のみであった。残り三名は男性性の傾向が強く、二名はどちらともいえない曖昧な立場にあることがわかった。人称詞において、自称詞では女性性の傾向が強く確認された。対称詞では敬称の使用が多く、性別的属性の判断が出来かねた。

次に特性について。対象者一名を除き、敬体、敬称の使用が目立った。敬体の特性から判断するに、馴れ馴れしさや辛辣さを含んでおらず、先行研究の指摘する対象者を侮辱するような特性がみられなかったといえる。

以上の結果から、「オネエ言葉」とは、先行研究の指摘する単一のスタイル、少なくとも「女性語の強調」であるとは言い難く、また文末表現と人称詞の観点からは対象者を侮辱するような特性を持たないと指摘できた。

〈卒論執筆体験記〉

私の卒業論文はかなり標準的ではないテーマと日程で構成されています。

まずテーマについて。「オネエ言葉」という聞き馴染みがないであろうテーマを掲げていますが、これは二回生の田上ゼミで触れたことがきっかけで設定したものです。

元々「女性語」に関心が深く、二回生の田上ゼミで「女性語」「役割語」の資料を集めていた際、偶然「オネエ言葉」に出会いました。さらに、好きな洋画でのゲイキャラクターに対する日本語字幕の相違から「性別」が言葉遣いによって制定されているように感じたことからも、このテーマに大変心惹かれていました。

卒業論文のテーマ設定時、二回生のゼミでかなりの先行研究を漁っていたこともあり、先行研究が少ないこともわかっておりましたので、「開拓者になってやろう」ついでに「面白そう」という気概でテーマを決めました。結果的にこの「面白そう」があったからこそ、次にお話しするちゃらんぽらんな日程でも何とか提出できたのだと感じています。

テーマに迷っている方がいらっしゃれば、視野を広げ、自身が興味を持てる、とかく楽しいテーマを設定してみると良い方向に進むかもしれません。

次に日程について。正直に申し上げますと、本格的に取り掛かったのは一〇月末からです。データ収集のためにテレビ番組の

文字起こしをしたのですが、五〇番組の文字起こしに取り掛かったのが九月末。そこからじわじわと進め、一〇月末に本腰をいれた次第です。四週間ほどかけて文字起こしを行い、一一月に入り、分析基準となる文末表現と人称詞の選定。一一月中頃に文字起こしをした資料から対象の文末表現と人称詞を計測、データ収集完了。末に分析完了。そこから一〇日で本文に取り掛かり、一二月一〇日に田上先生に初稿を提出しました。かなり杜撰な出来だったため、そのあと一〇日でブラッシュアップ。補注と表を作り、卒論提出締切日に提出いたしました。絶対に真似しないでほしい日程ですが、これでも本気でやればなんとかなります。

さて、この「本気でやる」ですが、まず、作業・内容ともにどのような段階を踏むのかと、自身が一つの作業をするのにどの程度時間が必要かは事前に抑えていたほうがよいと感じました。また、どれだけ分析結果が出なくとも、どういった結論に落ち着かせたいのかもおおよそ考えておくとよいと思います。個人的な感覚では、仮説の設定というよりは結論の種類を設定するといった感覚でした。

そしてこれらを設定するためには、ある程度の先行研究を見ておく必要があります。先行研究の流れは似たものも多いですから、一〇個ほどみて、どのような流れあるいは結論になっているか見ておくと楽に事が進むと思います。私は卒業論文に四三の参考文献を盛り込んだのですが、使用しなかった資料も含めておそらく六五ほどは文献を見ていると思います。関係がなさそうなものでも単純に知識が増えて楽しめますから、ぜひいろいろ触れてみてください。また、卒業論文が形になってくると、なにが必要で、どの情報が欲しいのか、自身の論を出来るだけ強化するため（卒業論文では、主観を排除するために他人の文章を使うので）の一文を探すといった感覚で探すと効率がよかったと感じます。

最後に。卒業論文といえど、レポートの延長であることに変わりないです。おそらく多くの人は今後これだけの文献に触れること、一つの文章を書くためにこれだけの時間と労力を費やすことなどそうそうないと思います。諦めさえしなければどうにでもなります。大学時代だけでなく、学生時代の集大成として踏ん張り、腹と腰据えて頑張ってください。

ちなみにですが、絶対このような日程で書かないほうがいいです。あまりに暴力的に行ったので、後悔もかなりあります。なにより先生方に絵にかいたような苦笑をされます。ただ、やろうと思ったらできるということだけお伝えできればと思っています。

心から応援しています。楽しみながら戦ってください。

田辺福麻呂歌集「哀弟死去作歌」の研究
―「はふ蔦の己が向き向き　天雲の別れし行けば」考―

森　下　成　海

〈論文要旨〉

田辺福麻呂は、萬葉第四期の代表的歌人である。しかし、田辺福麻呂の作品の中には研究の進んでいないものがある。その一つが、本論文で取り上げる「哀弟死去作歌」（巻九・一八〇四～一八〇六）である。

「哀弟死去作歌」の長歌（巻九・一八〇四）後半の「枕詞」が連続するという特徴について、「連續して九個の枕詞を使用したのは、感情表出の妨げになる」（武田祐吉『増訂　萬葉集全註釋』角川書店、一九五六年）といった評価が見られる。

確かに当該歌後半部の五音句は「枕詞」の特徴を持ち、「枕詞」に分類されるものであるが、一様に「枕詞」と言っても次の二種がある。

A）歌意に関与する枕詞
B）歌意に関与しない枕詞

当該歌の「枕詞」は、Bの「歌の意味に影響を与える修飾句」であると考える。

本論文で扱ったのは、当該歌後半部の「（はふ蔦の）　己が向き向き　（天雲の）　別れし行けば」の箇所である。『萬葉集』には、柿本人麻呂の石見相聞歌（巻二・一三五）をはじめとして、福麻呂と同時代の大伴家持にも用例（巻十七・三九九一）のある「はふ蔦の別れ」という定型表現が見られる。つまり、当該歌は次のような構造を持つ。

はふ蔦の　己が向き向き　天雲の　別れし行けば

「はふ蔦の別れ」という従来の表現を匂わせながら、「天雲の別れし行けば」と歌ったところに、作者の工夫を見出すべきである。

まず、「はふ蔦の己が向き向き」は、先行する定型表現「はふ蔦の別れ」と同じく、「蔦が枝分かれする様子」を想起させる表現である。

一方、「天雲の別れし行けば」のイメージについては、諸注で異なる解釈が提示されている。最も多く、五つの注釈書が取るのは、「雲が分裂する様子」であるという解釈である。しかし、本論文では、多田一臣『万葉集全解』の「天雲が遠く離れて行くところから、「別れし行けば」に接続」（筑摩書房、二〇〇九年）という解釈が妥当であると考えた。

福麻呂歌の「雲」の唯一の他例「天雲の退きへの極み」や、その他の萬葉歌の「雲」を参考にし、「雲が遠く離れて行く様子」を言う表現が萬葉歌に見られることを明らかにした。また、『萬

葉集』の用例から、「別る」という語について考えた。「別る」は、道が分かれるように「二つの方向に分かれる」という意味に留まらず、「別る」と「行く」を組み合わせた言い方で、「一人が元いた場所を置いて離れて行く」と解釈できるものがある。当該歌の「別れし行けば」は後者の意味を持つ表現であると考えるべきである。

「はふ蔦の別れ」は、人麻呂の「石見相聞歌」をはじめとして、家持の歌にも用例があり、『萬葉集』において定型表現であったと考えられる。一方、「天雲の」を「別れ」の枕詞として用いた歌は他にない。しかし、どこまでも遠ざかって行く天の雲を表す「天雲の別れし行けば」という表現は、二度と会うことのできない弟を送る挽歌に相応しい。福麻呂は、意図して「はふ蔦の己が向き向き」と「天雲の別れし行けば」を呼応させたと考えられる。「はふ蔦の別れ」だけでなく、「天雲の別れし行けば」を加えて別れを表現したところに、福麻呂の感性と技巧が認められる。

そして、「はふ蔦の己が向き向き　天雲の別れし行けば」のような仕掛けは、「枕詞は歌の意味に関係しない」という前提があると気づくことはできない。長らく注釈書で福麻呂のの技巧が見逃されてきたのは、「枕詞」は歌の内容に大きな影響を与えないという考え方があったからではないだろうか。「枕詞」は、固定された決まりで使われたものばかりではない。作者が明確なイメージを持って選び取り、歌に用いたものがある。「枕詞」は、福麻呂歌のみならず、すべての萬葉歌において気を配られるべきものである。

〈修士論文執筆体験記〉

私にとって、修士論文の執筆は、とても苦しい体験でした。文献を調べることや解釈の可能性を探すことは、時間を忘れて没頭できるものでしたが、明確な答えを出し、あるいは出したように見せ、それを文章にするのはつらい作業でした。

「たとえその時代に行くことができて、その人の隣に座っていたとしても、その人が何を考えているのか、わからないこともあるんじゃないか」という話を、先に修了して行った同級生としたことがあります。図書館で『蒙求』を流し読みしていた時、鐘子期が亡くなった後、伯牙が琴の弦を絶ったという有名な故事を目にして、何か湧き上がるものがありました。十四歳の時、友人が、「あなたの言う孤独の意味が私にはわかる」と言ってくれたことがありました。中学生の私は、人生には彼女と同じような人がいくらでも現れるものだと考えていた。あの頃の私に彼女と同じだけの賢さがあったならと思います。

でも、後悔することができるようになったことが成長であると

今は認めたいと思います。大切なことはすぐにそれとわかるものばかりではなく、何年、何十年と生きて、様々な経験を積み重ねて行く過程で、気づき、理解できることもあるのだと思います。

「文学研究では知りたいことのすべてに迫ることはできないのかもしれない」という考えはまだ消えていませんが、悩み、考えた経験は無駄ではなかったと思います。この五年間で得たものは、私の中に一生残るものであるとわかります。

○修士論文執筆中に感動した作品　立原道造の詩、テニスンの詩、ハイフェッツが弾くヴィターリのシャコンヌ、唱歌の朧月夜、中宮寺の半跏思惟像、サッソフェラートの眠る幼子イエス

最後に、私を根気強く導いてくださり、論文の書き方だけではない様々な視点をくださった小山順子先生に深く感謝をいたします。また、温かく見守り、励ましの声を掛けてくださった京都女子大学国文学科の先生方に心から感謝いたします。本当にありがとうございました。

国文学科卒業論文・修士論文発表会に参加して

三回生　小川　真緒

私は今回初めてこの発表会に参加しました。一、二回生の時はまだ早いと思って参加を見送ってきたのですが、先輩方のご発表や卒業論文の執筆体験などをお聞きすることができ、非常に有意義な時間を過ごすことができました。そして、一回生の時から参加しておけばよかったと思いました。

発表を聞いていて、まず、参考資料の多さに驚きました。時間の都合上、論文の一部分のみの発表であるのですが、随所に様々な文献の引用があり、自分の今までの発表資料やレポートがいかに未熟なものであったかを痛感しました。また、先輩方が資料に載せられている以上の先行研究や注釈書を数多く読んだことを知り、卒業論文を執筆するにあたり、テーマに対する情報収集がとても重要になることを学びました。

そして執筆体験談からも、どこか曖昧だった卒業論文執筆のイメージを鮮明なものとすることが出来ました。先行研究の資料を集めることに一番時間がかかったことや、そもそもあまり研究されてこなかった分野のため、先行研究を見つけること自体が難しかったことなど苦労したことについて以外にも、先行資料の内容のみをまとめたファイルを作っておくことや、資料を見つけたら

すぐにコピーを取る事など、卒論作成において役立つようなアドバイスもいただけました。

一番印象に残ったのは、「卒業論文を書いて良かったと思ったこと」についてです。自分が調べられるところまでは調べきって結論を出すことが出来たため、今とても達成感がある、との回答を聞いて、私も卒業論文を書く際には、後悔することが無いように、そして達成感を味わうことが出来るように真剣に取り組みたいと思いました。発表してくださった先輩方、お忙しい中貴重なお話をありがとうございました。

二〇二四年度卒業論文・修士論文発表会に参加して

四回生　浦田彩水

五月一一日、爽やかな風の吹く心地よい気候の中、卒業論文・修士論文発表会に参加させていただきました。

私は近代文学のゼミに所属しており、今回発表していただいた先輩方とは専攻分野が異なるものの、全ての先輩方の論文発表に参考となる部分が多くありました。この体験記では、先輩方の論文執筆体験談を拝聴し感じたことを記そうと思います。

私にとって一番印象に残ったアドバイスは、卒業論文執筆に行き詰まった時や不明な点がある時には、すぐにゼミの担当教員に相談するということです。「悩んでいることもまとめてくださるので、思考がクリアになる」とおっしゃっていて、その言葉に先輩方が皆頷いていらっしゃいました。その様子を拝見し、大切な事なのだと感じました。私も実践していこうと思います（峯村先生、よろしくお願いいたします。）。

その他にも、執筆にかかった時間、就職活動との兼ね合い、論文の結論が明確となった時期、先行研究の数が少ない時の対処法、執筆において役に立ったこと等々、様々な情報をお聞きすることができました。卒業論文執筆時、不安になることが多かったという先輩方が、さまざまなアドバイスの後に、「諦めなければ何とかなる！」とおっしゃってくださったことも、とても心に響きました。

本年度、私は司会としてこの会に参加させていただきました。至らないところもございましたが、発表者の先輩方や国文学科の先生方、在学生の方々が温かく見守ってくださることで、無事役目を終えることができました。私は国文学科の方々のこのような雰囲気がとても好きで、そのような場所で学ぶことができていることをとても幸せに感じています。

長くなりましたが、今回の体験を糧にし、卒業論文の執筆に取

り組んでいこうと思います。

最後になりますが、ご発表くださった先輩方、改めて貴重なお話をありがとうございました。

卒業論文・修士論文発表会の感想

沢　柳　妃　奈

まず、この会に参加して本当に良かったと思います。私自身、現時点で卒論執筆の具体的なビジョンもまだ定まっておらず漠然とした不安がある中で、先輩方が書かれた卒業論文や体験談について詳細に聞くことができてとても参考になりました。私たちの不安を拭い、執筆のモチベーションが上がるような内容だったと考えます。

座談会では論文のテーマをどのように決められたのか、先行研究資料をどのように探されたのか、どのようなスケジュールで執筆を進められたのかなど在校生の質問にも丁寧に答えてくださいました。五名の先輩方各々の体験談を聞くことができたので、様々なパターンを知ることができました。研究を行う時代によっても調べ方や資料の活用の仕方が異なる部分があるのだと感じました。例えば、国語学では現代のオネエ言葉を調査されていたためテレビ番組を資料として活用されていました。様々なところにヒントが隠されているはずなので視野を広く持ちながらアンテナを張っておきたいです。先行研究について調査を進める際に一番時間がかかったと仰っていたため、先行研究の調査と整理、資料に対しての自身の見解をその都度まとめるよう心掛けていきたいと思いました。

実際に今回の会に参加したことで卒業論文に対してのモチベーションが上がりました。それぞれ異なる分野の先輩方の卒業論文・修士論文の内容もとても興味深く、論文内容に関しての質疑応答もとても面白く感じました。このような難しく、素晴らしい論文が自分にも書けるのか頭がパンクしそうな部分もありましたが、先輩方も同じような不安を抱えながら執筆されたというお話を聞いて、初めは同じような気持ちだったのだと感じました。卒業論文執筆に関して鼓舞していただけた有意義な時間を過ごすことができました。

新入生歓迎行事　能楽鑑賞会観覧記（五月二五日）

多くの学びを得た能楽鑑賞会

一回生　川　井　茉奈未

美術館で能と狂言に関する装束や面といった展示品を見たことがあったり、高校の音楽の授業で能の一幕をビデオで鑑賞したりと触れる機会は度々あったものの今回の会を通して初めて実際に能楽を鑑賞した。

多くの学びと感動を得ることができ、中でも能面の表情の豊かさを知ることができたことに常識が一変するような驚きを覚えた。実際に面の向きに対して光の当たる向きが変わると影から感じる印象が変わり、表情が無いという慣用句である能面という意味とは異なり感情の豊かさを表現する工夫がされていた。

その他にも装束の着付けを順を追って声掛けをしながら行う流れを見せていただき、偉い人の面前で能を披露した時に衣装の着崩れといったトラブルの際の責任の所在をはっきりさせる必要があったという歴史的な背景も同時に解説していただけたことで、能楽が好きだった戦国武将といった事前知識と結び付けて知ることができたのでより面白く思った。着付けた後に、気崩れないように糸で縫い付けるというのも今時の安全ピンでないのだなという昔のまま伝統を受け継いでいることを知ることができた。髪の整え方、結い方は初めて見聞きするもので驚きが多かった。髪が馬の毛からできたもので、それを整えた後に役柄に合わせて乱していく過程が一つひとつ毎舞台丁寧に行っているのだろう舞台裏を見ることができて良い経験になったと感じた。

能楽の「橋弁慶」という演目は牛若丸と弁慶の言葉の掛け合いと斬り合いを表現した場面が迫力があってとても印象に残った。画面越しでは味わえない地謡の声の響きが独特な奥ゆかしい世界観を作り出していて言葉そのものの意味は理解できないながらも感動した。

狂言における笑い方や泣き方を実演していただき、ともにやってみることでその後にみた狂言「寝音曲」の笑い方を今どの程度笑っているのかを考えることができより深い面白さを感じることができたと思う。また、声の抑揚や謡うことの難しさが感じられて演者である狂言師のすごさを感じることができた。

今回の能楽鑑賞会を通して、画面越しでは分からない音圧や響き、このような特別な機会でないと見ることができない能楽師が舞台に立つまでの流れを知ることができてとても良い経験になった。

能楽の面白さ

一回生　坂　向　野　々

今回の能楽鑑賞会で、私は初めて能楽というものに触れた。そして、実際に能楽の舞台を体験して、能楽の面白さを知った。

能装束の着付けでは、解説を聞きながら着付けの様子を見ることができ、多くのことを学ぶことができた。髪の結い方や着物を着付けは全て手作業で行われ、とても繊細で素晴らしいものであった。また、紐を結ぶ強さを確認するために「おしまり」と訊ねるような装束着付けの際の作法が何百年経った現在でも失われることなく、伝承され続けられていることに感動した。私が着付けの解説の中で、特に印象に残っていることは、演じる役に合わせて襟の色を変えているというお話である。お話の中で出てきた色の合わせ方以外にどのような組み合わせ方があるかを知りたいと感じた。

囃子の実演では、笛、小鼓、大鼓、太鼓について教えていただいた。それぞれの楽器に使われている素材や音のなり方の違いなど、楽器が持つ様々な特徴について学ぶことができた。私は、四つの楽器の中でも特に笛の音色が気に入った。笛の音色はとても美しく、ずっと聞いていたいと感じた。

狂言では、今も昔もおもしろいと感じるものは同じであると実感した。「寝音曲」のお話はとても面白く、思わず笑ってしまうような場面が多くあった。お話の内容自体ももちろん面白いものであったが、何よりも狂言者の方の表情や話し方、動きが舞台をより面白くし、私たちの笑いを誘うものであった。昔の人たちも今の私たちと同じように、狂言という「喜劇」を楽しんでいたのだろうと思った。

最後に観させていただいた舞台は、仕舞「橋弁慶」であった。弁慶と牛若丸の斬り合いの場面はとても迫力があり、圧倒された。牛若丸の刀と弁慶の薙刀がぶつかり合うところや相手からの攻撃を避ける際の動きには一切無駄がなく、見事なものであった。また、仕舞の謡も素晴らしく、聞いていて、とても心地が良かった。

何百年もの間、人々に愛され、今もなお多くの人々を魅了し続ける能楽は本当に素晴らしいものであると感じた。そして、今回の能楽鑑賞会では、多くの学びを得られることができ、とても貴重な経験となった。今後、能楽など日本の伝統芸能に触れ、自分の学びを一層豊かなものにしたいと思う。

日本の伝統芸能の能を鑑賞して

一回生　三　好　弘　華

能は室町時代から始まり、今ではユネスコ無形文化遺産となっている。昔の人は、能を見て、涙したり笑ったりと、真剣に見入ったことだろう。何百年も経った今、令和の時代に私たちも昔と同じように、能を見て笑い、感動し、心を動かされている。

今回の能楽鑑賞会の感想を一言で表すとするならば、「圧巻」だ。舞台の端では、まず地謡の方たちが正座をしている。舞台の真ん中には、まだ誰もいない。静寂が何秒間か続く。これから何が起こるのか私たちは分からず、ドキドキしていた。すると、能の主役である「シテ」がバッとでてくる。空気がガラッと変わった。床を踏む音、よく通る声、一気に見入ってしまう。戦いの場面になると、地謡の声がだんだん大きくなる。迫力があり、ハラハラとする。能が終わった後でも、頭の中で、あの声と足音、音色、ストーリーが響いており、忘れられない強烈な魅力、インパクトがあった。

舞台といえば、能や狂言以外にミュージカル、オーケストラなどがある。それはそれで魅力があるが、静寂の中で聞こえる着物の裾が揺れる音、舞い上がる着物、すり足の音、舞台を踏む音、リズムにのった力強い声、観客との一体感、この美しさは日本の伝統芸能がおりなす芸術であり、能でしか味わえないと感じた。一つ一つの動作に隙がない。息を飲むのも忘れてしまう。私は一気に能の魅力に気づかされた。また見たいと思った。

今回の能楽鑑賞会は、能を見ただけではなく、いろいろなお話を聞いたり、実際に体験したりした。

突然であるが、ひな祭りの時に飾る五人囃子の座る順番を知っているだろうか。正面から見て、右側から謡、笛、小鼓、大鼓、太鼓となっている。これは、どこから音がなっているかが関係しており、音が出る位置が高い順番に並んでいるそうだ。これと同じように、能の囃子も並んでいるそうだ。

また、能の笑い声や、泣き声なども実際に声に出して体験した。どちらも末広がりで縁起のいいとされる八に関連して八回声をだすそうだ。

このように、普段は知ることのできないこと、体験できないことができた貴重な時間だった。

今回、能楽鑑賞会の司会、会場設営として携わったが、やりがいや、一緒に会場を作り上げる一体感を感じることができ、とても楽しかった。これを機に自分でも、能の舞台を見に行こうと思った。

二〇二三年度（令和五年度）論文題目

博士論文

平安・鎌倉時代文学の出産―母子・祖父と政治　北條　暁子

修士論文

田辺福麻呂歌集「哀弟死去作歌」の研究
―「はふ鳥の己が向き向き　天雲の別れし行けば」考―　森下　成海

卒業論文

上代

『萬葉集』における「橡」の意味
―一三一一番歌と二九六五番歌の解釈を中心に―　池田　朱里

『万葉集』における「ひとり」の歌の性格
―八一八番歌、四二九二番歌の解釈を中心に―　久世ひかり

大和三山歌の解釈の再検討
―三山の関係を妻争いの説話との比較から探る―　坂野　来夢

大伴旅人の萩の歌考
―一五四一番歌・一五四二番歌を中心に―　澤田　奈那

万葉集の「報」と「和」
―「報」と「和」に区別はあるのか―　新谷　瑞樹

『萬葉集』巻二・一三三番歌における「乱友」の訓読
―「サヤゲドモ」説は妥当か―　高谷　美帆

『萬葉集』巻四・六五一、六五二番歌考
―男性仮託の観点から―　田所　奈央

『万葉集』巻九・一七四〇番歌の「白雲」考
―「丹後国風土記逸文」との比較を中心に―　手嶋　桜子

枕詞【ぬばたまの】の考―献呈挽歌の表現―　中川　陽菜

巻十三相聞歌一考―長反歌の関係を中心に―　鍋島　千紘

『万葉集』における「泊瀬」の意味合い　藤尾　美有

『萬葉集』〈挽歌〉の「黄葉」
―上代における「黄」のイメージを中心に―　堀　杏純

古代和歌の「手枕」の性格　松本　絢音

「月夜」は月か夜か
―『萬葉集』の「月」と「月夜」の検討を中心に―　松本望有里

歴史書の虚構と『萬葉集』
―大津皇子の伊勢下りは完全な捏造か―　矢野佑美香

中　古

中宮定子称賛論―『枕草子』を中心に―　榎島　里奈
『千五百番歌合』における後鳥羽院の本歌取り　大石　華央
―手法と紀貫之からの影響―
『落窪物語』の身体表現―手で表現される北の方の怒り―　金田　優奈
『蜻蛉日記』道綱母の支え　岸本　美穂
―両親・子どもをとおしてみる兼家への態度―
「移ろひたる」心　平　一葉
―『蜻蛉日記』にみる男の心への眼差し―
『源氏物語』六条御息所の人物造型　聳城はるな
―中宮彰子との関係―
『源氏物語』末摘花の美しさの性質　中村　和奏
浮舟と飛鳥井女君の入水未遂比較　藤井　沙理
『土佐日記』の亡児悲傷表現について　松野　衣吹
男らしさ・女らしさの描かれ方の変化　渡邊　郁
―とりかへばや物語から令和の恋愛漫画まで―
八代集における「春の夜の夢」　井阪　未来
『隠岐本新古今和歌集』における後鳥羽院の詠について　岡田　愛海
海藻の和歌　高柳　景
『枕草子』における清少納言と中宮定子の贈答歌をめぐって　藤﨑　遥香

中　世

あさぎ色が物語に与える効力について　岸下　佳蓉
―『今昔物語集』『宇治拾遺物語』を中心に―
『今昔物語集』巻二十第三十七話の研究　原田　花梨
―『日本霊異記』中巻第三十三縁と比較して―
『風に紅葉』における無常と執着　藤本　悠生
『増鏡』序文・末尾文における独自性の継承　稲垣紗佑里
―『水鏡』序文・跋を中心に比較して―
義孝説話における和歌と漢詩の配列について　井上　蓮
『今昔物語集』と『宇治拾遺物語』の猿神退治　大江　裕子
―猿神を中心に比較して―
後妻打ちにおける作法確立の様相　金田　梓
―北条政子の事例に注目して―
『血盆経』から『女人成仏　血盆経縁起』へ　木下　諒子
―再編への工夫―
『唐物語』第十八話結語攷　田中かれん
―後人補入説に対する再検討―

『今昔物語集』巻十四第33話考
―医師による治療の一文を中心に―　西上　佳奈
『江談抄』の性格―大江匡房の他作品との比較を通して―　西村　奏
『宇治拾遺物語』『今昔物語集』動物説話考
―鹿説話をめぐって―　坪内はるか
狂言から見る中世の犬の姿　西中川詩乃
狂言『墨塗』の女の涙　岩本さゆり
狂言の鬼の特徴―笑いの対象としての鬼―　大佛　サト
狂言「釣狐」の白蔵主は妖怪なのか
―『絵本百物語』との比較を中心に―　黒田亜香里
狂言における主従の特徴　酒井　智永
謡曲『敦盛』の作意と社会的背景
―武士の罪の意識や霊魂観をめぐって―　田中　理那
狂言における聟入り―「猿聟」を中心に―　牧　紗矢香

近　世

沢庵と和歌　伊藤　安未
猫の和歌―恋の歌から考える―　大谷　花
『水無瀬御影堂御奉納五十首和歌』についての考察
―歌題を中心に―　鎌田　栞
『法華経』と喝斜説話―口が曲がるということ―　小林　史佳
〈折る〉和歌の考察―なぜ枝は折られるのか―　堀中　風歌
落語『向う付け』と『読み違い』における「無筆」　西　可倫
酒呑童子の造形について　大西　沙穂
『男色大鑑』前半四巻における義理の性質　鈴木　彩日
橋姫説話にみられる結末の異同についての考察　時田　育実

近　代

星新一「セキストラ」論
―星作品における作風の異質性の検討―　有田　早希
泉鏡花「山中哲学」論
―『誓之巻』「怪語」との関連―　生田　七海
国木田独歩「忘れえぬ人々」論
―描かれる「自然」と「小民」の特質―　上垣　尚子
泉鏡花「海城発電」の作品構造
―書簡体形式による効果―　大橋　有咲
泉鏡花の作品における「藤色」の効果
―作品内に「藤色」を取り入れる鏡花の意図―　武田　莉緒
泉鏡花「外科室」における血汐の表現
―「雪の寒紅梅」の役割―　谷口　凪

梶井基次郎「Kの昇天」論
——溺死の描写における「昇天」——　德重　佳澄

田沢稲舟「唯我独尊」に見る文壇での戦略と小説作法　直野　杏実

泉鏡花「薬草取」におけるヒロインの変化
——湯女から異界の女へ——　中村　野衣

「ボーカロイドアーティスト」歌詞の特徴
——カラオケランキングをもとに——　山田　茉依

坂口安吾「夜長姫と耳男」論
——夜長姫の死の表現が意味するもの——　下村　花恋

佐藤春夫『車塵集』の風景　羽石　栞

子どもに向けた文学として読む太宰治の「魚服記」　内藤　愉井

太宰治にとっての葛西善蔵
—「猿面冠者」「碧眼托鉢」から—　石津　央

夢野久作『少女地獄』における〈解体〉論
—夢野の自然主義批判から見る『少女地獄』—　大久保瑠華

太宰治「列車」
—列車が象徴したものと一〇三号が持つ意味—　嵯峨山仁美

宮沢賢治「茨海小学校」「雪渡り」における狐の二面性について　竹村　星来

梶井基次郎「冬の蝿」—主人公が海に求めたもの—　寺本　遊林

国語学

ホラー小説におけるオノマトペ
—音韻形態・型・用法の分析—　土居　美禄

絵本における死の表現特性
—一九〇六〇年代〜二〇二〇年代の絵本を中心に—　小木曽　都

漫画・ノベライズとのオノマトペの違いについて
—『あやかし緋扇』をもとに—　佐々由希菜

落語のオノマトペ—昭和戦前・戦後の比較—　板谷あさひ

用法が多様化した言葉の変遷と現状
—「大丈夫」「普通に」を中心に—　一井里佳子

オノマトペの構成要素と意味の関係性
—京都女子大学におけるアンケート調査をもとに—　大倉可緒莉

当て字を含む名前の読み方の変遷
—名前に使用できる文字の制限—　大原　佳子

京都女子大学生の敬語意識—アンケート調査を基に—　奥野　暖佳

漫画作品にみる関西方言の性差　亀﨑　若菜

漢字一文字の名詞から見る二〇〇〇年代楽曲
—「愛」「恋」「涙」の推移から見る感情と社会変遷—　河本　栞捺

石川方言の現状 ―高校生へのアンケート調査をもとに― 北村　香乃
ビジネス敬語の誤用
―大学生へのアンケート調査から見る― 木下みどり
J-POPにおける一人称と二人称 黒木　琴未
香川県高松市の方言の使用状況
―高校生へのアンケート調査― 河野　華子
若者言葉とカタカナ語形容詞
―「エモい」と「キャパい」を中心に― 駒井　妃奈
応援ソングの歌詞分析
―野球・サッカー大会テーマソングにおける― 齊藤　明音
「オネエ言葉」の性別的属性と特性
―テレビ番組での発話をもとに― 齊藤　摩弥
近現代日本演劇の戯曲におけるセリフの変化
―「共話」の観点から見る言いさし表現の効果― 坂田真依子
遠州弁の推量表現「ラ」「ダラ」「ズラ」の使用と
若年層の方言意識について
―高校生へのアンケートをもとに― 鈴木　佑香
山口県西周防方言について
―萩方言との比較及び使用状況と方言意識― 髙倉　美波
子どもの名づけについて 髙見　藍里
―赤ちゃんの名前ランキングから見える特徴― 武中　千紘
流行歌における歌詞の変遷
―一九八〇年代と二〇一〇年代の比較― 田坂　小雪
摂津方言の文学作品への影響 田中　すず
徳島県方言の現状 ―阿南市の若者における― 辻　香音
恋愛歌詞の特徴
現代の小説作品から考察する適切な読点の使用法について 中西ことの
女性歌手が歌う流行歌の歌詞について 鯰江まりん
―一九八〇年代と二〇一〇年代の比較―
一人称の使い分け ―文学作品における― 西　美織
「女ことば」と「男ことば」 平田　萌乃
―流行歌における終助詞を中心に―
名前における性表示機能 藤本　美音
―日本人の名前ランキングより―
人称代名詞の性差的特徴 ―アイドル楽曲を対象として― 星野　美優
断り表現の「大丈夫」 丸野可奈恵
日本語の謝罪表現 室　佑佳
―用例分析とアンケートによる現状調査―
歌詞における当て字表現 ―アンケート調査より― 森　あすか

漫画『ゲゲゲの鬼太郎』におけるオノマトペの特徴　井上　夕明

『響け！ユーフォニアム』における表現論　神田　千夏

―原作版とアニメ版との比較―

漫画『文豪ストレイドッグス』の振り仮名について　櫻井寿樹奈

―漢字に片仮名が付された場合―

断り表現「大丈夫です」における省略　島田明日香

現代においてことわざはどのように根付いているか　須佐美萌絵

略語の定着―「マック」、「マクド」を中心に―　林田　新奈

もじ言葉の発生について　尾藤　空

美化語の地域差と世代差について　廣瀬　琴実

長野方言「ずく」について　藤森　未慈

―県内の方言意識と郷土意識をふまえて―

「語感踏み」の分析　森　いづみ

―日本語の音節構造とラップの押韻―

『女子大國文』投稿規定

一、（投稿資格）

① 京都女子大学国文学会の会員は投稿することができる。

② 京都女子大学国文学会の会員以外の者も、編集事務局の判断で寄稿を認める。

二、（刊行回数・時期・投稿の締め切り）

① 毎年二回、九月と一月に刊行する。

② 毎年、五月十日と九月三十日を投稿の締め切りとする（厳守）。

三、（投稿の枚数）

枚数は原則として自由であるが、四百字詰原稿用紙、四十枚（注・表・図版などを含む）を目安とする。また、完全原稿であることを原則とする（多少の加筆訂正はやむを得ないが、段落や章の差し替えなど大幅な修正を加えたものは、査読を行う関係上不可）。紙面の都合等により、目安の枚数を大きく超過する原稿に対しては、編集委員会より分量の削減を依頼することがある。

四、（投稿に際して提出すべきもの）

① 手書き原稿の場合、投稿原稿二部（審査用。二部ともコピーしたものでも可）。

② ワープロ原稿の場合、プリントアウトしたもの二部（審査用）と、投稿原稿が収められている電子データ（ワープロ専用機の場合は機種、パソコンを使用の場合はワープロソフト名を通知すること）。

五、（投稿に際しての注意事項）

① 論文末尾に所属、回生、卒業年度などを丸ガッコに括って記すこと。本学の教員・院生・学生の場合は、（本学教授）（本学大学院博士後期課程）（本学文学部国文学科四回生）などと記す。

② 連絡先の住所を記した別紙を添えること（採否の知らせや校正送付等のため）。その際、投稿原稿についての連絡事項をすみやかに行うために、差し支えなければ、電話番号・ファックス番号・メールアドレスなども添えること。内部の教員・院生・学生は直接原稿のやりとりをするので、住所は不要だが、必要に応じて電話番号やメールアドレスを『女子大國文』編集事務局から聞くことがある。これらの個人情報については、投稿原稿についての連絡以外に使用することはしない。

③ 原稿については、引用の正確さと厳密さ、出典の明示、先

行研究との重なりなどに留意すること。また二重投稿にならないように気を付けること。

六、（投稿先）

〒六〇五―八五〇一　京都市東山区今熊野北日吉町三五番地
京都女子大学国文学会
『女子大國文』編集事務局

七、（投稿論文の採否）

投稿論文の採否は、編集委員の査読、または関連分野の外部研究者査読の結果を経て、編集委員会にて決定し、結果を投稿者に通知する。

八、（校正）

校正は原則として、再校までとする。校正段階での大幅な修正は、査読を経た関係上認められない。

九、（本誌・抜き刷りの贈呈）

投稿論文が掲載された場合、本誌二部、抜き刷り三十部を贈呈する。増刷希望の場合は、実費執筆者負担で受け付けるので、採用の通知を受けてからすみやかに『女子大國文』編集事務局まで連絡すること。

十、（掲載論文の著作権及び電子媒体による公開）

本誌に掲載された論文等については著作権の複製権・公衆送信権を京都女子大学国文学会及び京都女子大学に許諾するものとする。但し、著作権の移動はなく、著作者は両者、或いはいずれか一方への許諾をいつでも取り消すことができる。

本誌に掲載された論文等の全文又は一部を電子化し、京都女子大学学術情報リポジトリサーバ或いはその他のコンピューターネットワーク上で公開することがある。

十一、（規定の改正）

① 本規定の改正は、会員の議決を経なければならない。

② 規定の改正の結果は、すみやかに本誌に掲載する。

附則

本投稿規定は平成十八年三月二十日より施行する。
本投稿規定は平成二十三年十月五日より一部改正施行する。
本投稿規定は平成二十四年十月二十四日より一部改正施行する。
本投稿規定は令和三年四月一日より一部改正施行する。
本投稿規定は令和六年六月五日より一部改正施行する。

編集後記

今号の査読委員は次の方々です。

坂本信道・宮崎三世

以上の各氏に査読を依頼し、編集委員会において査読結果を報告、審議の結果二点が掲載となりました。

また、寺島恒世先生、出口智之先生に、二〇二三年度公開講座のご講演内容をご寄稿賜りましたこと、厚く御礼申し上げます。

卒業論文・修士論文発表会でご発表くださり、論文の要旨および論文執筆体験記を寄せて下さった卒業生の方々、新生活でお忙しい時期にもかかわらず、ありがとうございました。

今後とも、会員の皆様の投稿をお待ちしております。

（野澤・山中）